

# IB教育における国語科授業と アクティブラーニング（AL）に関する総合的研究

◎中村 純子（東京学芸大学日本語・日本文学講座国語科教育分野）

○中村 和弘（東京学芸大学日本語・日本文学講座国語科教育分野）

廣瀬 充（東京学芸大学附属国際中等教育学校）

代表者連絡先：[sumicon@u-gakugei.ac.jp](mailto:sumicon@u-gakugei.ac.jp)

【キーワード】 国語科 国際バカロレア アクティブラーニング 言語と文学

## 1 研究の目的

今回の平成30年版学習指導要領改定にむけて、国語科教育では授業のあり方の大きな転換期を迎えている。従来の「何を教えるか」という知識の質や量に着目した教師の指導のあり方を問うのではなく、学習者が課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的活動することを通して、「学び方を学ぶ」学習活動が問われている。主体的対話的な深い学びを促す授業、アクティブ・ラーニングである。

本プロジェクトでは、新たな授業のあり方を研究する上で、国際バカロレア（IB：International Baccalaureate）の研究が有効であると考えた。IBの特徴は、生徒中心、探究型、対話型の授業デザインにある。中核的な問いを探究し、概念の理解と獲得が目指されている。評価は、記述や口述の論評に対してルーブリックを活用して行われる。ここに、日本で展開すべき国語科教育におけるアクティブ・ラーニング（AL）の指導の方が見いだされると考えた。

本プロジェクトでは、プロジェクトメンバーの実践紹介や講師を招いての講演などの研究会を開催し、IB教育を活かした国語科AL授業の指導法や、指導教員の養成についての課題に対して、一定の方向性を見出すことをねらいとした。

## 2 国際バカロレアとは

国際バカロレアとは、国際バカロレア機構（IBO）が1968年に設置したチャレンジに満ちた総合的な教育プログラムである。世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として始められた。2017年現在、世界147カ国で実施されている。日本の小学校段階に相当するプライマリー・イヤーズ・プログラム（PYP）、中学1年から高校1年対象のミドル・イヤーズ・プログラム（MYP）は、母語での教育が尊重されてきた。高校2・3年生対象のディプロマ・プログラム（DP）の実施で認定された言語は、英語・スペイン語・フランス語のみであった。しかし、2013年より日本語と英語によるデュアルランゲージDPが認定された。附属国際中等教育学校では2010年からMYPを、2016年から日本語DPを実施している。IBで日本の国語科に相当する教科は、PYPでは「言語」、MYPでは「言語と文学」、DPでは「言語A」の中で「文学」「言語と文学」である。そこで、本プロジェクトでは附属国際中等教育学校で実施しているMYP「言語と文学」とDP「文学」を中心に研究を進めていく。

DP「文学」では、2年間のシラバスでは、「翻訳作品」「精読学習」「ジャンル別学習」「自由選択」の4つのパートに分かれ、大学入学資格の評価となる最終課題の試験に向けて授業を展開する。教材は指定図

書リストで指定されており、試験は小論文や口述コメントリー、プレゼンテーションで行われる。評価は「知識と理解」「作者の選択についての認識」「構成と展開」「言語」などの観点からルーブリックを用いて判定される。こうしたDPで求められる「概念」を活用し探究する力を早い時期から育成すべく、1994年からMYPが設置された。MYPでは全教科で育成すべき16の重要概念と6つの「グローバルな文脈」と、教科特性に応じた12の「関連概念」が設定されている。MYPではこの三つの概念を一つずつ組み合わせ、「探究のテーマ」と「探究の問い」を設定し、評価方法と指導計画を立てていく。教材の指定はなく、教師の裁量に任されている。指導内容が明確で、概念ベースで単元を構成するシステムはあるものの、教師の創造性を発揮したオリジナリティ溢れる授業作りが求められるのがIB教育である。

重要概念 (Key Concepts)

Aesthetics 美しさ	Change 変化	Communication コミュニケーション	Communities コミュニティ
Connections つながり	Creativity 創造性	Culture 文化	Development 発展
Form 形式	Global interactions グローバルな相互作用	Identity アイデンティティ	Logic 論理
Perspective ものの見方	Relationships 関係性	Systems システム	Time, place and space 時間、場所、空間

「言語と文学」の関連概念 (Related concepts)

Audience imperatives 受け手側の受容	Character 登場人物	Context 文脈	Genres ジャンル
Intertextuality テキスト間の関係性	Point of view 視点	Purpose 目的	Self-expression 自己表現
Setting 設定	Structure 構成	Style スタイル (文体)	Theme テーマ

### 3 本プロジェクトの実施内容

#### 3-1 1年目の研究成果の内容

1年目は附属国際中等教育学校の国語科教諭らの発表などからIBの国語科授業実践について発表を受け、DPやMPAのカリキュラムの基本設計の理解や、ALの授業デザインの方略の理解に努めた。

#### ① IB教育全体の特徴と枠組みについて、日本の教育との比較

IB教育の全体の理念、カリキュラム・デザイン、授業方法の特徴、一般校との違いなどを明らかにした。例えば、IB教育では、育成すべき10の学習者像が明確に定められており、授業スタイルも双方向型のディスカッションと探究型の学習の成立が目指されている。教材の扱い方にも大きいがある。例えば、高等学校では、日本では「源氏物語」の「桐壺」など一部の巻の、さらにその一部が掲載された教科書を扱う。だが、DPでは、指定図書リストの「源氏物語」項目に挙げられた2巻を丸ごと選択して読むことが求められる。

#### ② IB教育における国語科授業デザインの方法の検討

附属国際中等教育学校のMYPにおける中学2年生と高校2年生の実践報告をもとに検討した。ユニット・プランナーを活用した単元設計から、それぞれ必要な手続きに沿って、授業デザインを行う方略を検討した。中心的に扱う概念（テーマ）を定め、生徒の到達状況の具体化、探究の中核となる問い、教材選定、パフォーマンス課題の検討、ルーブリックの作成、学び方の習得と活用など設定していく。教科書教材ありきで進める日本の国語科の授業づくりのプロセスとは大きく異なることが判明した。

#### ③ 国語科授業実践におけるIB導入の影響と効果についての検討

教科書教材を中心に進める従来の国語科授業に対して、IB教育では概念をベースとして授業をデザインするところに大きな特徴がある。生徒ともに中核的な問いを探究し続けるところに授業の面白みもあり、また、テストに頼らない評価のあり方も従来の国語の授業と異なる点である。一方、追究の過程で多様な

言語活動を駆使するために、何のために書くのか・話すのかと入った目的の明確化が必要であり、同時に、それらの追究を支えるために、テキストの正確な読解や語彙・文法の学習などこれまでの国語科授業が重視してきた側面も、IB教育において大切であることが確認された。

#### ④海外の国語科教育実践例とのIB国語実践との比較・検討

西オーストラリア州における英語科のカリキュラム・デザインをもとに、ユニットの課題例とルーブリック評価の実際の事例を検討した。西オーストラリア州の英語科は、「コンベンション」「コンテキスト」「過程と方略」の三分野から到達目標が示され、それぞれについてルーブリックが明示されている。実際の生徒作品をもとにした評価事例を検討した。コア概念を中心とするカリキュラム設計は、IBと一致するものであることを確認した。

#### ⑤次期学習指導要領の国語科改善の方向性とIBの取り組みとの比較

中央教育審議会での審議経過を踏まえ、特に高等学校国語科における課題として指摘されている「教科書教材等への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業が行われる傾向」について、IB教育の観点からの改善について検討した。その結果、中教審が示すアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とIB教育が目指す授業のあり方との重なりがかなり大きいことが明らかとなった。

### 3-2 2年目の研究成果の内容

2年目は、定期的に研究会を開催し、近隣のIB教育実践校から講師を招き、IBのカリキュラムの理解を深めると同時に、MYP「言語と文学」のカリキュラム構造と評価についての知見を広めることができた。

#### ①MYP「言語と文学」の取り組み 単元「戦争を知る 戦争を語る」

廣瀬 充 (東京学芸大学附属国際中等教育学校)

平成28年度、中学2年生で全17時間かけた実践である。指導目標の重要概念は「ものの見方」である。「私たちは何らかの媒体を通じてしか、事実・事象を知ることができない。」という探究のテーマを、「戦争」を主軸に取り組んだ。教材は、小説、詩、評論文、ドキュメンタリー映像、新聞記事、歌詞など多様な作品で構成した。生徒は多様な視点から理解を深め、意欲的に学習活動に取り組んだ。概念をベースにし、問いを探究するために複数の教材を扱うMYPの単元設定は内容の一貫性が生まれ、深い思考力が形成されることが確認できた。

#### ②IBDP『文学』の可能性

高松 美紀 (東京都立国際高等学校)

「独自の観点から文学を分析し、論じる力の育成」を学習目標とし、文学作品の論評の指導を行っている。独自の視点を重視するため、初読の印象を大切にす。リフレクションでは論評の相互評価を行い、自己の学び方の課題を明確にさせる。学習者は「構成・語り手・登場人物・文体・メタファー」といった分析の観点を習得し、次の作品分析で応用する力がついていく。教師はファシリテーターとして、テキストから論拠を述べさせることを徹底し、分析批評を深めていく。DPでは教科書を離れ、丸ごと1冊の本を扱う。作品全体を扱うことで読みの観点が広がり、読解力が急激に伸びる。「内容・技巧・論理性・言語」と観点毎に評価を出すので、生徒の独自の解釈の可能性を評価しやすい。DPは最終試験課題に縛られる

デメリットがあるが、学びの体系化がなされている点では日本の国語科教育に取り入れるべき点は大きいことが確認できた。

### ③「MYPを活用した実践事例とユニット指導案」

内藤 満地子 (アメリカン・スクール・イン・ジャパン)

中学3年・高校1年対象の2016年度前期のユニットでは、MYP「言語と文学」とDP「文学」で扱う「概念」をベースにしている。ユニットのタスクは「1見えないもの」「2今を生きる」「3エゴイズム」「4コンテキストの影響(翻訳と時代背景)」「5新しい文学」の5つで構成している。各タスクで3～4つのテキストを用意している。テキストのジャンルは小説、詩、説明文、ドキュメンタリー番組等多岐にわたる。教材選択の観点、文学作品分析の指導ポイント、単元デザインの「逆向き設計」など、具体的な方略を確認できた。さらに、『羅生門』『告白』の指導事例から発問の詳細な立て方と指導方法が分かった。

### ④フランス国際バカロレア校 International School of Paris、石村清則先生の実践一

関 康平 (開智日本橋学園中学校) 2016年11月、

石村教諭の授業を見学した関教諭の報告である。石村教諭はヨーロッパのDP「言語A」の採点官を務めるベテランである。授業では生徒に文庫本を持参させ、約3ヶ月をかけて1冊を読み込んでいく。中学2・3年では、『伊豆の踊り子』『ハツカネズミと人間』『友情』『竹取物語』『土佐日記』、高校1年では、『破戒』『蠅の王』『人間失格』『方丈記』『伊勢物語』を扱っている。今回は2016年11月の授業見学の報告である。高校3年生の授業で、前半は『谷川俊太郎詩集』の「じゃあね」という作品の口述試験の練習、後半は『風の歌を聴け』の読解演習。前半は生徒の発言を中心に解釈のヒントを質問で導き、後半は教師の解説を中心に行っていた。高校2年生の『砂の女』の授業では、非現実世界を構築する作者の意図、三人称と一人称の語り視点の交錯の効果など、教師の解説を中心に生徒と討議していた。基本的には生徒の発言を遮らず、対話形式で読解を深める授業スタイルである。授業の内容は毎週のレポート課題でまとめさせ、採点指導を行っている。少人数学級ならではの信頼関係に基づく授業であった。

### ⑤南オーストラリア州・グレナング・インターナショナル・スクールの取り組み

吉田 和夫 (玉川大学教師教育リサーチセンター) 稲井 達也 (日本女子体育大学)

アデレードにあるグレナング・インターナショナル・スクールでは、国際バカロレアコースを併設している。21世紀型スキルの習得と国際感覚、創造的な思考、責任在る市民としての可能性の発展を教育目標としている。IBプログラムは、探究や課題解決を重視し、少数精鋭で実施されており、学校全体として学びの質的な向上を図ることに貢献していた。特に、海外の大学進学を希望する生徒にむけてのエリート養成として位置づけであった。学校図書館では、Wi-Fi環境の充実や共同学習用の丸テーブルの設置など「ラーニング・commons」としての環境が整えられていた。IBを実践する上での学習環境を確認した。

### ⑥これからのカリキュラム・デザイン論から見た国際バカロレアの可能性

成田 喜一郎 (東京学芸大学教職大学院)

ホリスティック教育は「人間・時間・空間・事物・精神などあらゆるものとのつながりや関わりへの気づき」「多様で異なる見方・考え方や感じ方、論理的な認識と直感的な洞察とのバランスの大切さ」「自立共生・共生共存に向かう自己変革と社会変革」「子ども達の成長を支援・促進する教師の指導」の4つの構

成要素を目指す教育である。これからの時代の教育はトランスミッション（伝達）型とトランスアクション（交流）型の双方を包括したトランスフォーメーション（主体変容・相互変容）型の授業が求められる。国際バカロレア教育はこれらの要素を備えており、さらに、ひと・もの・ことを横断・縦断して越境する力があり、概念学習と理解を促すカリキュラムの逆向き設計に大きな可能性がある。しかし、IB 認定校となるための手続きや認証、評価、財政的負担などの条件整備の困難さや、社会的経済的格差拡大への助長とならないかという危惧、西欧的価値観への偏りという危うさもあることも確認できた。

#### 4 研究の成果 今後の課題と提言

以上二年間の研究を通して、IB「言語A」の指導に関する深い知見が得られた。知識暗記型の教育から脱却し、「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指す平成30年版学習指導要領改訂の方向性とIBのカリキュラムは一致していることが明らかとなった。学習者の学びを対話形式で深め、小論文でまとめていく。テキスト分析の観点や問いの立て方の指導は教師主導で行いながらも、対話で導いて生徒独自の解釈を確立させていく。こうしたIBの授業形式はまさにALである。こうした授業を通して「概念」が獲得され、多様な文脈に則して汎用的に活用できる思考力が育成されることは、研究会で取り上げた指導事例から十分に実証された。

IB教育の普及にむけて、学習環境の整備も必要だが、何より講義形式の授業から脱却するための新たな指導スキルを備えた指導教員が必要である。対話型の授業をファシリテートするスキルである。中村純子はIBの知見を活かし、このスキルを備えた指導教員養成の方略を中等国語科教育法で開発に取り組んだ。その成果の一つを『学大生が作る 中高・国語科 アクティブ・ラーニング授業実践事例集』の冊子として発行した。

IB教育を活かした国語科AL授業を指導できる教員の育成は本プロジェクトの今後の課題である。同時に、新しい授業スキルを習得できる柔軟な発想力を備えた人材を確保するために、暗記型の学力を問う入試スタイルから、新たな学力を問う入試スタイルへと改革を進めることも本学の課題であると提言する。